

H29年度 学校だより 3月号
花文樹
 ～満開の笑顔と夢～

(は) 働かせよう 心 頭 体
 (な) 仲間と ともに
 (さ) 最高の自分を めざして
 (く) 苦しいことにも 進んで挑戦する
 (き) 今日、この今を せいっぱい

私たち大人が、次の世代へ「伝え継ぐもの」とは
 ～絵本『手から、手へ』の「やさしさ」を考える～

「手から、手へ」 池井 昌樹

やさしい父と
 やさしい母との間に産まれた
 おまえたちは やさしい子だから
 おまえたちは 不幸な生を歩むのだろう

やさしい父と やさしい母から
 やさしさだけを 手渡され
 戸惑いながら 石ころだらけな
 けわしい道を 歩むのだろう

どんなに やさしい父母も
 おまえたちとは 一緒に行けない
 どこかへ やがてはかえるのだから

やがては かえってしまうのだから
 助けてやれない
 なにひとつ 助けてやれない

そこからは たったひとり

まだ あどけない笑顔に向かって
 やさしい父と やさしい母とは
 うちあけようもないのだけれど

今は におやかなその頬が痩け
 その澄んだ瞳の凍りつく日が訪れても
 怯んではならぬ 憎んではならぬ
 悔いてはならぬ

やさしい子らよ おばえておおき
 やさしさは この父よりも
 この母よりも 遠くから
 受け継がれてきた
 血まみれな バトンなのだから
 手渡すときがくるまでは
 けっして 手放してはならぬ

『手から、手へ』詩：池井昌樹 集英社 (2012.10) より

日々の子育ての中で子どもと向かい合う時、そこには「子どもに対する愛情」が貫かれています。ただ、愛情の意味を取り違えてしまい、子どもの言いなりに陥ってしまう等、愛情とは程遠いものになってしまうケースも多いようです。

『子どもが育つ魔法の言葉』の中にも、「やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ」とあります。「優しさとは何か」「優しいとは、どのように接することなのか」という疑問がわいてきたとき、『手から、手へ』という一冊の絵本に出会いました。

その冒頭部分を左に紹介しています。ここには、両親から与えられた優しさゆえに、不幸の生を歩むことになるという暗示があります。そして、「やさしさ」とは、ずっと受け継がれてきた「血まみれのバトン」であるとも表現されています。

「優しさ」というものが、これほどまでに厳しく覚悟をもった表現でなされている文章に初めて出会いました。ぜひみなさんも、この詩に描かれている「一人の人間として生きること」や「大人として子どもへ伝えるべきこと」について考えてみていただければと思います。

いよいよ今週16日(金)には、卒業証書授与式を迎えます。58名の卒業生達の記念すべき日にあたって、「言葉と責任・覚悟」にかかわるメ



ッセージを式辞として伝えたいと思います。在校生にバトンを渡した6年生との別れの時が迫っています。

